

【ねがいましては】

第94号

平成9年4月24日

共和珠算学習塾

「大切なこと」

久しぶりに灰谷健次郎さんの新刊を手にししました。「すべての怒りは水のごとくに」（倫書房）です。まだすべて読み終えていないのですが、読むにつれ、ここに安らぎが漂うのを感じました。

それは中学3年間を過ごした少女の手紙から始まりました。彼女は学校へは1か月余りしか行かなかったことを「大切だった」と言っています。登校拒否と一言で片づけてしまえばそれまでなのですが、彼女の自身に満ちた文章には「人らしさ」を感じました。彼女はその3年間から次の3つの結論を書いています。

- ・勉強以外のもっと大切なことを学びたい
- ・自分が納得のいくまでとことん考える時間がほしい
- ・何かに疑問をもつような時間がほしい

〇〇がしたい、〇〇がほしいなどは、我がままと取られがちですが、彼女のそれは全く別物であり、真剣に生きようとするところからの叫び声なのです。

「記憶」を最優先としたような学校の裏側、学校の進度についていけないと、「落ちこぼれ」というレッテルを簡単に貼り付けてしまうような世界。それをそのまま鵜呑みにしてしまいがちなご両親や子どもたち……。それをそのまま利用しようとする社会。教育のすべてがゆがんでしまっているのではないかと気づかされる文章でした。

ここに彼女の一文を載せさせていただきます。

— 学校……というか、私たちよりも長く生きている大人に教えてほしいのは、数学や英語だけでなく、「人間として大切なこと」が一番だと思います。私たちはまだ若いから、これからたくさん壁にぶつかったり、時には粉々にくだけてしまうかもしれません。そういうときにマイナスからゼロに戻って、また壁へ向かっていく力を大人から教えてもらいたいと思うのです。—

なんとすばらしい言葉なのか、言われたままに行動し、何の疑いもなく学校生活を送っている多くの子どもたちの中であって、しっかり自分自身を持っていることに、私は全身が震えるのを感じました。

私は塾という仕事を長年させていただいています。その中で「仲間がいる」という気持ちが湧いてくるのを今回の子の文章は感じさせてくれました。現実と理想の中に常に板挟みになりながら歩いてきた自分に、大きな力を与えてくれた彼女の手紙でした。このような子がしあわせになれる社会こそが本物の社会です。

私のこの「ねがいましては」は、一貫して「こころ」中心に取り上げています。そしてその一本のまっすぐな道をけっして外れることなく、これからも塾業に勤めさせていただきます。

最後におうひとつ、この本の中の一文を載せさせていただきます。沖縄県渡嘉敷島で生活されているご老人（女性）の一言です。

— 人間が勉強するのは、えらい人になるためではありません。

人間が勉強するのは、いいひとになるためです。だから、ひとは死ぬまで勉強 —